

報道とオリエンタリズム

— 東日本大震災の英語報道における日本人の ステレオタイプの表象の批判的分析 —

溝上 由紀

Orientalism in News:
Critical Analysis of Stereotypical Representation of Japanese People
in the English Newspaper Coverage of the Great East Japan Earthquake

MIZOKAMI Yuki

1. はじめに

2011年3月11日に日本の東北地方を襲った東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）は、マグニチュード9.0という日本観測史上最大の巨大規模の地震に引き続いて、波高10メートル以上の大規模な津波が起り、国内の自然災害の被害者数としては戦後最大の死者・行方不明者約1万9千人という甚大な被害をもたらした。

欧米の新聞や雑誌などの英語メディアは、この震災を「災害ものの映画の一シーンのよう（“like a scene from a disaster movie”, *The Sunday Telegraph*, Mar. 13, 2011）」、「誇張ではなく、（原爆投下後の）広島のように（“No exaggeration, it looks like Hiroshima”, *The Sun*, Mar. 14, 2011）」、「旧約聖書の恐ろしい黙示録の一シーンのよう（“the scene could be one of those apocalyptic ones from the Old Testament”, *Daily Mail*, Mar. 16, 2011）」などと表現し、第二次世界大戦後の日本報道としては前例のないほどの規模で、東日本大震災の報道を連日行った。一連の報道の中で注目を集めたのは、特に東北地方の被災者たちを含めた日本人全体の震災時の行動や対応について、‘calm’（冷静さ）、‘stoicism’（平静さ、冷静さ、ストイックさ）、‘resilience’（回復力の早さ、強靭さ）、‘fortitude’（不屈の精神）、‘order’（秩序）、‘civility’（礼儀）、‘solidarity’（団結）、‘unity’（一体感、協調性）などの語を使って、称賛あふれる論調の報道が多く行われたことである。報道の詳細は後述するが、ここで一例を挙げるならば、次のような論調の報道が新聞各紙に頻繁に見られた。尚、本論文中の英語の日本語訳は筆者が全て自らの責任で行っているものである。

(Japan) seems to be handling its greatest crisis since World War II with decorum, fighting chaos with order. . . There has been virtually no evidence of looting or rising crime levels, and the Japanese have shown stoicism while waiting in long lines. Also on display have been Japan's unrelenting politeness and its love for group consensus (*Charleston Daily Mail*, Mar. 15, 2011).

(日本は、第二次世界大戦以来の重大な危機に礼儀正しく対処し、秩序を持って戦っている。略奪や犯罪率の上昇を示す証拠はほぼ見られず、日本人は長い列で待っている間も冷静である。また、日本人の確固たる礼儀正しさと、一致団結好きも示された。)

アメリカ在住のジャーナリスト佐藤成文氏は、これらの一連の報道を「(日本や日本人の)イメージを一段と向上させるものだったという点で特筆される(佐藤、2011、54)」ものであり、震災後半年間は、海外の新聞・雑誌の“日本称賛”報道という点に限って言えば、「日本にとっての finest hours だったと言える(佐藤、2011、54)」と述べている。早稲田大学教授の東浩紀氏も、*New York Times* 紙に寄稿し3月17日付けで同紙に掲載された記事において、日本人の冷静さや道徳的なふるまいが海外で称賛されたことは、「実は日本人自身にとっても驚きだった (“[A]ctually this was a surprise to the Japanese themselves.”)」し、このことで、「そうだ、みんなやればできる (“Yeah, we can do it if we put our minds to it.”)」、「結局、日本はそれほど悪い国ではない (“We aren't so bad as a whole nation after all.”)」と多くの日本人が感じており、震災をきっかけに日本人が自国を肯定的に見始めているのではないかと捉えている (*New York Times*, Mar. 17, 2011)。

重大な危機の中での冷静で秩序を保った日本人のふるまいが、本当に世界から賛嘆され評価されたとするならば、日本人として率直に誇りを持って良いのかもしれない。しかしながら、筆者がどうしても奇妙な違和感をぬぐえないのは、震災時の対応をめぐる一連の日本称賛報道が、外国人記者の表面的な観察と思ひ込みに基づいたステレオタイプ的な日本人の見方にすぎないのではないかと思われて仕方がないからである。政治や行政に落ち度があってもデモや暴動を起こす事がほとんどなかったり、露骨に怒りを表したり悲しみに取り乱したりしないなど、日本人の冷静さ、ストイックさというステレオタイプは、国内外で広く知れわたっており、それは時に外国人から、あるいは日本人自身からもこれまで日本人の主張のなさや受動性の現れとしてしばしば批判の対象にさえなってきたはずである。また、日本人の集団指向というステレオタイプも、これまでしばしば侮蔑や揶揄の対象になってきたはずである。今回の報道の流れの中で、「一致団結して不平を言わず冷静に黙々と逆境に耐えている日本人」のステレオタイプな姿が、称賛の対象になったことに対して、我々は日本人として素直に喜んでいけばよいものなのだろうか。

また、日本は平和で治安が良いというステレオタイプも国内外でよく知られており、あたかもそのステレオタイプをなぞるように、今回の一連の報道の中で、震災時の混乱の中でも略奪行為や犯罪がないと多数の英語メディアで報じられたが、実際には大規模な暴動こそないもの

の、略奪行為や義援金詐欺などの犯罪はかなり行われた。このように考えると、英語メディアの記者たちは、これまでに広く流布している日本や日本人のステレオタイプの言説に基づいて、その言説に合致する現象だけを一面的に見て報道を行い、それが今回の一斉の日本称賛報道につながった可能性があるのではないかと推測せざるをえないのである。

今回は結果的に、欧米人により、国際社会の中での日本人のイメージを良くする可能性がある報道が重ねられたのだから、ありがたいと思いきそすれ問題視する必要はないと思われるかもしれない。しかし、西洋と東洋の非対称な権力関係が固定化しているような現代世界において、欧米の英語メディアによって報道される東洋の日本人の表象は、決して客観的で中立的な事実の表象などという純粋でナイーブなものではありえない。それどころか、それは実は、サイード (1993) が提起した「オリエンタリズム」というイデオロギーを多分に含んだ視点、すなわち、「われわれ」西洋とは異なった「異質な他者」として東洋を常に劣位なものとして認識し、西洋の優位性を保持するような視点から表象されたイデオロギー的構築物であるといえるのではないだろうか。実像以上に美化され理想化された日本人の姿は、欧米人の人種主義的偏見の反転したネガであると言えはしないか。別の言い方をすれば、報道する当事者（英語メディアの書き手）も、報道の客体である日本人もあるいは気がついていないかもしれないが、西洋の東洋に対する優位性が圧倒的な現代社会の中で行われたこれらのステレオタイプの日本称賛報道は、実は本質的に差別的であると考えべきではないか。本論はこのような問題意識から出発し、東日本大震災時における日本人の態度やふるまいについて報道した英語メディアにおける日本人の表象を批判的に分析してみる試みである。

本論では、分析対象として、主にアメリカや英国やカナダなどの英語圏の国々で発行された英語で書かれた新聞や雑誌の記事を扱う。これらのメディアの言説は、印刷媒体のため、テレビやラジオの報道などより検証が容易であるとともに、世界で最も流通する言語で書かれ世界の人々が接することの最も多い、普及力のある言説であるという事実と、国際世論の形成における英語メディアの論調の影響は決して看過できるものではないという意味で、検証する意義が大きいと考えられるからである。

一般に、ニュースは中立的で客観的な外側（アウトサイダー）の視点から報道されているとしばしば誤解されている。そして、ニュースの受け手は、読んでいる記事が、世界で起こっている出来事の忠実な描写だと信じがちである。しかし、Caldas-Coulthard (2007) が指摘しているように、ニュースは実際は、出来事そのものではなく、多くの目を通して再構築された「出来事のレポート」である。どのように観察するかによって、ニュースの現実は変化するという意味で、ニュースはある価値判断に基づいて作られた文化的製作物である。また、Richardson (2007) は、あるニュースがそのように報道されるのには常に理由があると考えているのが適切であると論じている。

Caldas-Coulthard (2007) は、欧米メディアにおけるブラジル人の表象を研究し、第一世界の欧米の言説において、第三世界の他者としてのブラジルがネガティブに表象される過程を明ら

かにし、欧米メディアは、第一世界（＝西洋）の文明化されたイメージを強化するため、「第三世界の彼らはああだが、文明化されたわれわれはああではない」というタイプの、彼我の違いを指摘することで第三世界の他者性を際立たせるような植民地主義的言説を未だに再生産し続けていると指摘している（281）。このことを今回の日本報道に照らした場合、東日本大震災を報道する欧米人記者たちは、すでにかつてから形成され定着している日本や日本人についての言説を参照にしながら目の前の現実をアウトサイダーの視点で理解し、そのアウトサイダーとして得た知識に基づいて記事を書くのだが、そのアウトサイダー的知識には当然すでにバイアスがかかっている。そして報道の受け手はそのバイアスに基づいたニュースを受け取り、日本や日本人についてのゆがんだ知識を形成することになる。マスメディアは大衆を受け手としているため、自国民が相手国に対してあらかじめ持っているイメージに合わせた報道を行う傾向は当然強くなるだろう。このような西洋のメディアの記者と受け手の間の相互作用の中で、「われわれ」西洋と「彼ら」東洋の対比は強調され、「われわれとは異なる他者」としての東洋＝日本人の表象が作り上げられていく。そして、すでに形成され固定化しているステレオタイプの影響がそれほど大きいということであれば、例えば今回の震災とは別の話題のときには、日本と日本人に対する一斉のネガティブ報道に容易に論調が流れる可能性さえもあろうということも認識しておくべきだろう。

さて、今回の東日本大震災における日本称賛報道が、過去から連綿と再生産され維持されてきた日本人についての言説に大きく影響されているということであれば、具体的な新聞記事の分析に入る前に、欧米における日本人の表象、すなわち日本人論の系譜について簡潔に振り返っておく必要があるだろう。次節では、震災直後にいち早く *New York Times* 紙に掲載され、その後の一連の日本称賛報道の流れにおそらく直接大きな影響を与えたと思われるアメリカのコラムニスト、ニコラス・クリストフ氏（Nicholas D. Kristof）のコラムと、そのクリストフ氏自身やその他の欧米人全般の日本人についてのイメージ形成にそもそも直接的あるいは間接的に影響を与えてきたであろう、幕末以降に流布されてきた日本人論の言説の大まかな流れについて検証してみることにする。

2. 日本人論の系譜

2.1. ニコラス・クリストフ氏の日本人称賛コラム

2011年3月11日に、東日本大震災が起こった当日の日付で、アメリカジャーナリズム界で最高の荣誉とされるピューリッツァー賞の二度の受賞歴のあるジャーナリストで、影響力のあるコラムニスト、クリストフ氏は、'Sympathy for Japan, and Admiration'（日本にお悔やみを述べ、称賛する）と題したコラムをいち早く発表した。このコラムは、アメリカ・ジャーナリズムの最高峰とされる *New York Times* 紙で、東京支局長としての滞日体験があり、1995年の阪神・淡路大震災の報道を経験している知日派コラムニストが、今後日本人がどのようにこの震災に対応するかということ、今回の震災直後にいわば予測したものである。このコラムはその後

の英語メディアの一連の東日本大震災報道の流れを作った重要なものと思われるので、やや長めに引用して詳しく検証してみることにはしたい。

コラムでは、“Watch Japan in the coming days and weeks, and I bet we can also learn some lessons.” (今から数日、数週間の間には日本をよく見ておこう。学べるものがいくつもあるはずだ。) と述べられ、阪神・淡路大震災時の日本人の様子について次のように描写されている。

[T]he Japanese people themselves were truly noble in their perseverance and stoicism and orderliness. There's a common Japanese word, “gaman”, that doesn't really have an English equivalent, but is something like “toughing it out”. And that's what the people of Kobe did, with a courage, unity and common purpose that left me awed.

(日本人自身の忍耐力と冷静さと秩序正しさは本当に立派だった。日本語でよく使われる単語に「我慢」というものがある。それは英語でぴたりとあてはまる訳はないのだが、「頑張り抜く」というような意味である。そして、それが、神戸の人々が、勇気と協調性、共通目的を持って行ったことであった。私は畏敬の念を抱いた。)

阪神・淡路大震災時の日本人のふるまいを描写したこの引用部分には、‘perseverance’ (忍耐力)、‘stoicism’ (平静さ、冷静さ、ストイックさ)、‘orderliness’ (秩序正しさ)、‘courage’ (勇気)、‘unity’ (協調性) など、東日本大震災についてのその後の一連の日本報道において他の記者たちがこぞって使用する語がすでに並んでいる。重大危機時の日本人の個人個人の冷静さと我慢強さ、そして、集団としての協調性、一体感などについての賛美である。それは、日本人の強さや回復力の早さを称賛する次のような描写のなかにも続いている。

This stoicism is built into the Japanese language. People always say “shikata ga nai” – it can't be helped. And one of the most common things to say to someone else is “ganbatte kudasai” – tough it out, be strong. . . Uncomplaining, collective resilience is steeped into the Japanese soul.

(このような冷静さは、日本語の中に組み込まれている。人々はいつも「仕方がない」と言う。そして、他人にかける言葉として最も多いのが、「頑張ってください」(耐え抜け、強くなれ)である。(中略) 不平を言わず、集団で立ち直ろうとする力は、日本人に深く根付いている。)

一方、阪神・淡路大震災時の犯罪率の低さが次のようなエピソードとともに語られている。

Japan's orderliness and civility often impressed me during my years living in Japan, but never more so than after the Kobe quake. Pretty much the entire port of Kobe was destroyed, with shop windows broken all across the city. I looked all over for a case of looting, or violent jostling over rescue supplies. Finally, I was delighted to find a store owner who told me that he'd been robbed by two men. Somewhat

melodramatically, I asked him something like: *And were you surprised that fellow Japanese would take advantage of a natural disaster and turn to crime?* He looked surprised and responded, as I recall: *Who said anything about Japanese. They were foreigners.*

(日本で暮らした年月の中で、日本の秩序正しさと礼儀正しさに私はしばしば感動していたが、神戸地震後ほど感動したことはない。神戸の港のほとんど全てが破壊され、街中の商店の窓が割れていた。私は、略奪や、救援物資をめぐる乱暴な押し合いへし合いの場面を探しまわった。ついに、二人組の男に盗みに入られたという店主を見つけて私は喜んだ。いくぶん芝居がかった感じで、私はこのように彼に尋ねた。「仲間の日本人が、自然災害を利用して犯罪に走ったことについて驚きましたか」。店主は驚いた顔をしてこう答えた。「誰が日本人だと言った？ 犯人は外国人だったよ。」)

これは、阪神・淡路大震災後の様子について書かれたものであるが、先述したように、東日本大震災後の報道においても、大混乱の中でも略奪や犯罪行為がほとんど、あるいは全くないと欧米の英字新聞各紙が報じている。決して事実ではないそれらの一連の報道に、このクリストフ氏のコラムはあらかじめ少なからぬ影響を与えたのではないかと考えられる。そして、クリストフ氏は、上記のように阪神・淡路大震災後当時の日本の様子を述べた後で、今回の震災での今後の日本人の行動について次のように予測している。

I find something noble and courageous in Japan's resilience and perseverance, and it will be on display in the coming days. This will also be a time when the tight knit of Japan's social fabric, its toughness and resilience, shine through.

(日本の回復力と忍耐力に私は気高さと勇気を見いだしている。そしてそれはこれから数日の間に示されるであろう。これはまた、緊密に編まれた日本の社会機構、その強さと回復力が輝くときでもあるだろう。)

クリストフ氏は上記のように述べ、日本人が今後、みんなで力を合わせて立ち直っていくことを予測している。額面通りに読めば、手放しの日本称賛コラムであり、実際に日本でも海外でも概ねそのように受け止められた。

しかし筆者は、コラムの最後で、絶望的な破壊の中で今まさに生存をかけて戦っている日本人の様子が、“something of a contrast to the polarization and bickering and dog-eat-dog model of politics now on display from Wisconsin to Washington” (分裂と口論と私利私欲にまみれたアメリカの政治の現状とは対照的な姿) という表現でアメリカの現状と対比され、“So maybe we can learn just a little bit from Japan.” (おそらくわれわれは日本から少し学ぶべきだ) とまとめられている部分に、アメリカの政治的現状を嘆くポーズを見せながらも、「(政治談義に忙しい) われわれ文明化された西洋」を優位に置く視点から、「(生存に必死の) 彼ら東洋の日本人」の惨状を

見つけているようなニュアンスを感じ取らずにはいられない。

ところで、このようなコラムを震災直後に素早く発表し、その後の一連の日本称賛報道におそらく少なからぬ影響を与えたと思われるクリストフ氏であるが、実は、*New York Times* 紙の東京支局長時代、またその後も「反日」あるいは「日本憎悪」とも受け取れる虚実ないまぜになったネガティブな日本報道を繰り返してきたことでも知られる。1995年から日本に赴任したクリストフ氏は、アメリカを代表するメディアにおける日本報道の中で、明らかな事実誤認の記事や、日本蔑視と日本の異質さを強調する視点で日本の社会現象を解釈したような記事を多く流し続けた。たとえば、1995年11月5日付「日本女性が読む野蛮な漫画」という記事では、日本女性がレディースコミックを読みあさり、レイプされることを望んでいるかのように書いていたり、1997年4月2日付「簡素な学校の制服に欲情することが流行」という記事では、日本男性が同世代の女性に脅威を感じるために、制服姿の女子高校生に陶醉するという倒錯した姿を紹介している（石澤、2004、121-122）。また、最近では2010年9月10日付電子版コラムで、日本と中国の間で外交問題になっている尖閣諸島の領有問題について、“So which country has a better claim to the islands? My feeling is that it’s China, although the answer isn’t clearcut.”（それで、どちらの国に分があるのか？はつきりとは分からないが、私の感覚では中国だ。）と特に根拠もなく述べるなど、反日の立場をあらわにしている。

そのようなクリストフ氏が、なぜ今回一転して逆境にある日本人の姿をほめたたえる姿勢を見せたのかという、個人の心情を詮索するのは不可能であるし、本論の主旨にそぐわない。ここでは、かねてから強烈な日本異質論を報道し続けているアメリカの大新聞のコラムニストが、日本人の特性の一部を「忍耐力があり、冷静で、秩序正しく、勇気があり、協調性があり、回復力が早い」などと描写し、東日本大震災時における一連の日本称賛報道の火付け役となったということのみ確認しておくにとどめたい。

2.2. 欧米人による日本人論の系譜

2.2.1. 幕末～明治時代

ところで、一連の日本称賛報道が、ひとえにクリストフ氏一人のコラムの影響に依るものと考えるのは適切ではないだろう。クリストフ氏自身も、また、今回の日本称賛報道に関わった他の記者たちも、過去から流布され根付いている日本人論のステレオタイプの言説に当然影響されてきているはずである。本節では、日本人と欧米人の交流が盛んになり始めた幕末・明治時代から、グローバル化した現代に至るまでの間に欧米人によって記述された日本人論のステレオタイプをいくらか振り返ってみたい。

幕末から明治初期に来日した欧米人は、当時の日本の文化が、欧米文化に比較して異質だったため、驚きをもってその特質を記述した。渡辺（2005）や佐伯・芳賀編（1987）などは、当時の欧米人が書き残した日本文明についての膨大な記述を渉猟し、紹介しているので、それらを引用しながら当時の欧米人の言説を少々だが検証したい。渡辺（2005）によると、当時の西

洋人で、日本文明に対する西洋文明の優位を心から信じない者はまずいなかっただろうと思われるが、強固な優越感と先入観にもかかわらず、彼らの多くは当時の日本文明や日本人に讃嘆の言葉を惜しみなく贈っている。たとえば、1858年に日英修好通商条約を締結するために来日したエルギン卿使節団の一員であったオズボーン (Sherard Osborn) とオリファント (Laurence Oliphant) は、著書の中で理想化されたバラ色の日本イメージを広めたとされる。オリファントにとっては、日本に高度な文明があることが実に予想外だったらしく、日本人の衣服や装飾の趣味の優雅さや、幕府の役人の洗練された紳士ぶり、買い漁らずにいられない美しい品々をほめ、鍵も錠もない部屋に物をおいて一度も盗まれたことがないとか、女性が口汚くののしる声を聞いたことがないとか、子どもが虐待されているのを見たことがないなど、多くの好意的な観察を残している。オズボーンは、「男も女も子どもも、みんな幸せで満足そうに見える」と述べ、オリファントは、「個人が共同体のために犠牲になる日本で、各人がまったく幸福で満足しているように見えることは、驚くべき事実である」と述べている (渡辺、2005、39)。

1877年に来日し、東京大学で教授を務めた動物学者のモース (Edward Sylvester Morse) も、帰国後の1917年に著した『日本その日その日』において、バラ色の日本像を記述している。記述内容は例えば、隅田川の川開きを見物したさい、行き交う舟で大混雑しているにもかかわらず、荒々しい言葉や叱責は一向聞こえず、聞こえてくるのは、「ありがとう」と「ごめんなさい」だけだったとか、相撲の見物人が、完全に静かで秩序的であり、演技が終わって見物人が続々と出てきたのを見ると、押し合いへし合いするものもなければ、高声でしゃべる者もなく、またウイスキーを売る店に押し寄せる者もないなどと、群衆のおとなしさや秩序正しさについて称賛している。また、アーノルド (Edwin Arnold) は、1891年の著作『Japonica』の中で、日本には、礼儀正しさ、礼節によって生活を楽しめるものによろしいという、普遍的な社会契約があると述べ、人生の辛い事も環境の許す限り、受け入れやすく品の良いものたらしめようとする広汎な合意、言葉と行いの粗野な言動の普遍的な抑制などがあると観察している (渡辺、2005)。時代は遡るが、16世紀に来日したポルトガルのイエズス会宣教師ルイス・フロイスも、『ヨーロッパ文化と日本文化』の中で、「我々 (ヨーロッパ人) は怒りの感情を大いに表わすし、また短慮をあまり抑制しない。彼ら (日本人) は特異の方法でそれを抑える。そしてきわめて中庸を得、思慮深い (フロイス、1991、194)」と述べており、モースやアーノルドの記述と似通った記述が見られる。

一方、1873年から1911年まで日本に滞在し、1890年に『日本事物誌』を著したチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) は、日本人の習性として、知的訓練を従順に受け入れる心性、国家と君主に対する忠誠心、付和雷同を常とする集団行動癖、外国を模範として真似する国民性の傾向、などを挙げている。渡辺 (2005) の指摘によると、チェンバレンの挙げるこの日本人の習性は、16世紀後半から17世紀初頭にかけて日本を見聞したポルトガル人やスペイン人が、日本人の特性として記述していることとほぼ同様である。しかし、日本文化に広く通じ、親日家だったと言われるチェンバレンは、あくまで西洋至上主義の視点から日本を見つめており、

例えば、日本の文学、美術、音楽、建築、どれをとっても西洋と比べて全く取るに足らないなどと主張してもいる（佐伯・芳賀編、1987）。

以上、渡辺（2005）や佐伯・芳賀編（1987）に依拠しつつ、幕末から明治期に日本を訪れた欧米人による、日本人の特性を好意的に述べている記述をいくつか紹介したが、上記の日本称賛の言説の中に見られる日本人像のいくつか、例えば、「鍵をかけなくても盗まれない」、「集団行動」、「（混乱の中でも）静かで秩序的」、「礼儀正しさ」などは、本論冒頭で紹介した、東日本大震災時の日本人の姿として欧米メディアで称賛された日本人像（冷静、礼儀正しさ、秩序、盗みがない、一致団結など）と、150年の時を経て完全な平行をなしていることに注目したい。幕末から明治時代当時の世界情勢を鑑みるに、欧米列強は、物質的、技術的に日本よりはるかに高度に発達し、世界を席卷していた。「白人の責務」、「文明化の使命」に基づき、植民地を拡大し、植民地の無知で野蛮な未開人を教化しようとしていた時代である。ということはつまり、上記で紹介した日本をめぐる記述は、西洋／東洋という欧米中心主義的な二項対立に基づいた、西洋＝文明の視点から、未開で野蛮な他者としての東洋の日本を記述したものだと考えられよう。従って、その言説には当然、本質的に日本を「異質なもの」、「劣等なもの」と認識するオリエンタリズム的偏見が貫いているはずである。つまり、この時代の欧米人の日本人についての記述が日本を称賛しているのは、おそらく異文化への尊敬に基づくものではなく、あくまでも英語で言うところの *patronizing* な視点、すなわち、相手を下に見ていたような視点、庇護者として優位に立った視点からなされたと考えるのが適切なのではないか。やや乱暴に極論すればこういうことだ。この時代の欧米人が、日本や日本人の特性を称賛しているのは、たとえばペットの飼い主が、（野蛮なはずの）ペットが（期待していなかったのに）良い子にしていたから驚いてほめている、というのにあるいは似たような構図なのではないかと思われるのである。そして、その当時と全く同じ日本人論の言説が、今回の震災報道でも繰り返されたということは、欧米人が日本人を見つめる差別的なまなざしは、現在に至っても変化していないことを表しているのではないか。

ところで、この時期は、実は欧米における日本女性のイメージが形成された時期でもある。19世紀後半から20世紀にかけてヨーロッパを席卷した日本趣味の芸術運動ジャポニスムは、当時さまざまな芸術分野に影響を与えたが、その過程で成立し、その後の日本女性のイメージ形成と維持に現在まで大きな影響を与え続けているものにプッチーニのオペラ『蝶々夫人』がある。小川（2007）は、このオペラ『蝶々夫人』を中心に、いくつかの先行作品や後続作品を研究し、一度成立した日本女性のイメージが、再生産されていく過程を分析している。『蝶々夫人』を中心とした一連の作品の中に立ち現れる主人公の日本女性は、「純情可憐で、献身的で、優しく、従順で、愛情のためなら犠牲をいとわない健気な」女性、西洋の男性にとって最高に都合の良い異国の他者として描かれている。西洋と東洋の関係は、しばしば「西洋＝征服者＝男性」と「東洋＝被征服者＝女性」の二項対立の構図で描かれることがあるが、ここでも西洋の男性と東洋（日本）の女性の恋愛をモチーフに、実際の日本女性の表象ではなく、西洋の

男性にとって都合良く理想化された日本女性の姿が描かれる。一連の作品の中では、文明の国から来た西洋男性が、未開の日本を発見し、観察し、日本的なものとは何かを定義づける。小川（2007）が指摘するように、作品の中で、日本の宗教は非キリスト教であるゆえに野蛮で非近代的な邪宗とされるなど、西洋男性の日本人や日本文化を見る目には東洋を被支配者と当然のようにみなす傲慢さが常につきまとい、「一般に奴隷や赤ん坊や女性によって表象される従属性、幼児性、後進性、兇暴性などの属性が日本人に与えられている（141）」のである。これらの作品はフィクションであり、実際の日本を描いたものではないとはいえ、これらの作品が欧米人の日本や日本女性のイメージ形成にある程度寄与したことはおそらく否定しがたいであろう。

2.2.2. ベネディクト『菊と刀』から現代まで

1946年にアメリカで出版され、アメリカ文化人類学で最初の日本文化論とされるルース・ベネディクトの『菊と刀』は、戦後の日本研究の方向性に多大な影響を与えたという点で特筆に値する。この本は、日本において予期されており、当然のこととみなされている習慣について述べたものであるが、特に影響力があったのは、欧米の罪の文化は内面的な罪の自覚により善悪を判断するが、日本の恥の文化は外面的強制力、世間の目を気にして善悪を判断する、と主張する西洋の「罪の文化」と日本の「恥の文化」の二項対立の対比である。ここでは、罪の文化の方が倫理的に優れているとの主張もほのめかされ、欧米の価値観を優位におき、日本を未開、野蛮と捉えて劣位におくような議論が展開されている（ベネディクト、2005、272-274）。『菊と刀』というタイトルは、日本人は「刀」を振り回すような好戦性、凶暴性、残忍性を持っている一方で、「菊」を愛でるような優雅さ、丁寧さ、上品さを持っているという日本人の二面性を表しているとされる（ベネディクト、2005、12）。日本人の行動特性について述べたベネディクトの記述をいくつか挙げてみると、「日本人は礼儀正しさの模範である（ベネディクト、2005、195）」とか、「日本人はけっして無気力をたのしまない。「無気力から立ち上がり」、「他の人びとを無気力から立ち上がらせる」ということが、日本においてたえず用いられる、よりよき生活をうながす呼びかけである（ベネディクト、2005、210）」などと述べられている。また、体面を重んじる日本人にはストイシズムが要求され、

「女は分娩の際に大声を立ててはならず、男は苦痛や危険に超然としていなくてはならない。洪水が日本の村に押し寄せてくる時、体面を重んずる人々はめいめい、携えてゆく必要な品物を取りまとめて高い土地に向かってゆく。そこには叫喚も、右往左往も、狼狽もない。秋分前後の雨風が猛烈な嵐となって襲来する時にも、同じような自制が認められる。そのような態度は、たとえ完全にそれを実現することができない場合があるにしたところで、日本人のおののがもっている自尊心の一部分をなすものである（ベネディクト、2005、182-183）。」

というような記述もされていて、ベネディクトの描く日本人の特性のステレオタイプは、東日本大震災時の報道で、日本人の姿を表現するのに多用された表現 ‘stoicism’ (平静さ、冷静さ、ストイックさ)、『resilience’ (回復力、強靭さ)、『fortitude’ (不屈の精神)、『civility’ (礼儀) と大変類似していることが認められる。

吉野 (1997) によると、この著作は、日本的行動や思考様式の独自性の議論を促進しただけでなく、後の学者がモデルとするような研究スタイルを提示した。それは、「文化の型」に対する全体論的な関心であり、日本社会を一枚岩の整合体と考え、その整合体の筋の通った図式を打ち立てようとする流れである。『菊と刀』は、フィールドワークに基づいた研究ではなく、そのための事実誤認や偏見が批判的になることも多かった。しかしながら、その叙述内容が正しいかどうかとは全く別のところで、竹山 (1984) が指摘するように、他の外国人が日本文化や日本人のことをほとんど知らないという実情も手伝って、これがその後の世界における日本評価の基準となって大きな影響力を持つことになった。

1960年代から1970年代は、日本文化論や日本人論が欧米で、また日本国内でも多く著された。欧米では、E.F. ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(1979)、E.O. ライシャワーの『ザ・ジャパニーズ』(1979)、日本では中根千枝『タテ社会の人間関係』(1967)、土居健郎『「甘え」の構造』(1971) など多くの論者たちがお互いの影響を受けながら、日本社会についてのステレオタイプを作り出した。マオア&杉本 (1982) は、この時期に出された日本人論の主な要素をまとめると、「日本社会は抜群に内部の調和がとれており、日本人は他の産業国の国民に比べて集団主義的な傾向が強く、コンセンサスや忠誠に価値を置く (17)」ということになると指摘している。別府 (1982) によると、日本人が集団主義的だという説が強調されたのは、欧米において、苛烈な個人主義を奨励するイデオロギーが支配的になった時代と符号する。結果、個人主義と集団主義の特殊な対比図が、欧米の学者の頭の中でできあがり、彼らはその眼鏡で日本社会をのぞき、日本は集団志向だというラベルをはりつけた。そこには、「個」とは、そもそも心理的成長を経て成熟した成人を指すため、「精神的には12歳の子供だ」とかつてマッカーサーに言われた日本人に、独立した「個」を認めたくない、との欧米のエゴもあったかもしれない。そして、ここで見落としてはならないのは、欧米の学者と日本の学者の相互交流・相互支持の過程である。西洋の学者が日本人は集団主義的だと偏見を持って特徴づけ、それを日本の学者が受け入れると、今度は日本で認められたということ自体が、西洋の学者にとっては自説が認められたという証明になるという循環があり (別府、1982、46-48)、日本人集団主義説は現在に至るまで、欧米人によってだけでなく、日本人自身によっても再生産され維持されてきている。しかし別府 (1982) が指摘するように、集団モデルはイデオロギーにすぎず、それは日本人の実際の行動についての事実の記述というよりは、日本はこうあるべきだという規範の記述だと考えられる。

一方、報道における日本人像は、たとえばアメリカのメディアの論調は常に日米関係を反映してきた。日本の敗戦から1970年代半ばほどまでは、「先生としてのアメリカと生徒としての

日本」という構図で、アメリカのメディア報道は日本に教え諭すような態度が根底にあったし、日本もそれを半ば当然のように受け止めていた。日本の経済進出が激しくなり、日米経済摩擦が激化していく 1970 年代後半から 1990 年代前半は、日本脅威論がさかんに流布された（石澤、2004）。アメリカにおいては、日本文化を異質だとして痛烈に批判する報道は、たとえば捕鯨問題などを切り口にしばしばなされてきているし、先述したクリストフ氏の記事に見られるような事実誤認と偏見に満ちた日本異質論の報道も現在に至っても時折見られる。

英国においても、状況は同様である。2002 年のワールドカップについての英国メディアの報道では、日本人の礼儀正しさに感心するなど、好意的記事が目立ったとされる（土生、2004）が、一方で、もっとも典型的な日本のイメージは、「柔軟性の欠如、感情の抑制、その結果としての暴力性」であるという指摘もある（近藤編、2005）。たとえば、英国高級紙 *Sunday Times* のマガジン版に 2001 年 9 月 9 日に掲載されたギル氏 (A. A. Gill) による写真入り 10 ページにわたる日本特集記事 “Mad in Japan”（狂った日本）は、激しい偏見に満ちた日本人異質論を展開している。「日本人は明確に奇妙である (“In fact, they're decidedly weird.”)」、「日本は西洋のストーカーである (“Japan has become the West's stalker.”)」などと述べた上、「日本の宗教には慰めも救いも贖罪も希望も励ましもないし、そして最も重大なのは、個人主義の概念もない、それだから彼らはいつも集団でいる (“There is no solace in Japanese religion, no salvation or redemption, hope, encouragement, and, most importantly, no concept of individuality, which is why you always see them mob-handed.”)」、「彼らは単に奇妙だとか、異なった人間だということではない。彼らは、証明書付きの狂人だ。日本は忌まわしい歴史、下劣な哲学と、抑圧された文化の上に建てられた、精神障害者施設である (“[T]hey are not eccentric, not just different, but certifiably bonkers. Japan is a lunatic asylum built on a hideous history, vile philosophy and straitjacket culture.”)」などの記述がなされている。このような人種偏見に満ちた記事が正統派の大新聞で流布される背景には、やはり東洋の他者である日本人は異質だ、特殊だと主張する記事が欧米の読者に受けるということであり、欧米の書き手と読み手の中に歴史的に内面化されてきた日本人像のステレオタイプに上記のような記述がある程度当てはまっているということであろう。これは、まさに、現在に至っても日本人（東洋人）を下等とみて差別する欧米中心主義の視点が、幕末・明治時代以降本質的には変化していないことの証左でもあろう。

日本人論で論じられる日本の独自性は、常に欧米との差異によって特徴づけられてきた。欧米の言説も日本人による言説も、欧米的なものに普遍的価値をおき、日本的なものはその価値から外れた特殊なもの、異質な他者として位置づけられるのが一般的である。日本人論では、日本の優位性に焦点が当てられるということは決してなく、欧米中心の視点から見た日本の文化的差異を強調する言及がなされ、そこでは常に欧米の日本に対する優位性が前提とされていると思われる。「文明化された」西洋と「野蛮で未開な異質な他者」東洋の二項対立のオリエンタリズム的構図は、過去の言説から現在の言説に至るまで常に再生産され強化されてきてい

るのである。現在は高度に文明が発達した日本について、「野蛮で未開な東洋」という言説が当てはめられるのかと思われるかもしれないが、たとえば日本のイルカ漁を批判するアメリカ映画をめぐる言説の分析をした拙論¹でかつて指摘したように、日本文化＝野蛮とみなす記述は、欧米の言説の中で現在も実際に見受けられる。そして幕末・明治期の言説においても、今回の震災報道においても、欧米人の言説が日本人を称賛しているように見えるとき、そこにはおそらく高度に文明化した「われわれ西洋」が進歩の過程ですでに失ってしまった人間性のようなものを日本の中に見つけ出そうとするノスタルジックなものさえも伴っており、それは、現代の日本のテレビ番組などでよくあるパターンの、東京中心の視点から、日本の片田舎の人々や、アジアやアフリカの奥地の人々の素朴な暮らしを紹介しながらその純粋な人間性に感嘆し、本質的にはその姿を後進的とみなしながらも同時に理想化しているような構図とパラレルをなすものであり、多分にオリエンタリズム的であり、patronizingである。

さて、ここまで、クリストフ氏のコラムと、幕末・明治期から現代に至るまでの、欧米人によって記述された日本人像の一部を見てきたが、これらを大まかにまとめると、日本人の特性のステレオタイプとして、過去から常に繰り返し同じようなことが語られてきているのだと分かるだろう。「冷静」、「ストイック」、「秩序正しい」、「礼儀正しい」、「従順」、「立ち直りが早い」、「盗みが少ない」、「集団としての団結」などいくつかのお決まりのパターンで、過去の日本人論の言説を参照しながら現代の言説が形成されてきている。その言説が事実を表しているかどうかとは関係なく、これらが欧米人が日本人に対して持つ既成の、そして歴史的に構築されてきた不動のイメージだということだ。これらのステレオタイプの日本人のイメージをすでに内面に形成している欧米人記者たちが、東日本大震災後の日本を訪れて日本人を観察したときに、これらのステレオタイプは当然あらかじめ大きな影響を与えることになっただろう。つまり、記者たちの多くは、自らのステレオタイプに合致した日本人の姿をとらえ、同じステレオタイプを内面化している欧米の読者に向けて、読者の期待に合わせた報道をすることになっただろうということだ。ここまでの考察をもとに、今回の震災報道における日本人のステレオタイプの表象の例を具体的に見ていくことにする。

3. 東日本大震災報道における日本人の表象の分析

本論文で、分析対象とする新聞・雑誌記事の収集には、世界中の主要英字新聞・雑誌を400誌以上収録したデータベース、ProQuest Newspapersを使用した。2011年11月4日の時点で、'East Japan Earthquake' と 'Japanese people' をキーワードとして検索したところ、ヒットした記事数が膨大すぎたため、日付を2011年3月11日の震災当日から3月20日までに絞って再検索した。それによりヒットした記事は865件であった。筆者はそれらに全て目を通し、本論の分析に関連する、被災した日本人の態度や様子についての何らかの記述がある115本の新聞記事を抽出した。

被災した日本人の態度や様子を描写したこれらの記事においては、日本人の態度を批判した

ようなものはほとんどなく、ほめたたえる報道が大半を占めていた。そして、それらの記事に描かれた日本人の態度や様子の言説は、主に次の五つのパターンに集約された。一つ目は、‘calm’（冷静さ）、‘stoicism’（平静さ、冷静さ、ストイックさ）などの語で表される、日本人の冷静さやストイックさを称賛する言説である。二つ目は、‘civility’（礼儀）や ‘politeness’（礼儀正しさ）などの語で表される、日本人の礼儀正しさを称賛する言説である。三つ目は、‘resilience’（回復力の早さ、強靭さ）、‘fortitude’（不屈の精神）などの語で表される、日本人の立ち直りの早さや強さを称賛する言説である。四つ目は、‘solidarity’（団結）、‘unity’（一体感、協調性）などの語で表される、日本人の集団としての一体感や連帯、助け合いの態度を称賛する言説である。五つ目は、‘no looting’（略奪なし）や ‘no rioting’（暴動なし）、‘order’（秩序）、のように、震災に乗じた犯罪のなさや秩序正しさを称賛する言説である。これらの五種類の言説が単独、あるいは多くの場合何種類か組み合わせで使用され、日本人の振る舞いを称賛する根拠とされている。ここで改めて繰り返すまでもなく、これらの欧米人による日本人の表象の五種類の言説は、前節までも検証してきたように、すでにステレオタイプとして過去から繰り返し記述され、欧米人の中に根付いているものである。以下では、それぞれのタイプの言説が具体的にどのように記述されているかを検証してみることにする。

3.1. 日本人の冷静さやストイックさを称賛する言説

今回の震災報道においては、日本人の冷静さやストイックさについての記述は大変多かった。それは、“Japanese are renowned for their stoical ability to pull themselves and persevere.”（日本人は、一体になって耐えるというストイックな能力で知られる。）（*Sunday Gazette-Mail*, Mar. 13, 2011）などという形でいわゆる一般論として紹介されているものもあれば、震災での日本人の様子を記者が直に見てエピソードを交えて紹介されているものもある。その中には、最大時で40万人を超えたとされる東北各地の避難所の人々の冷静な様子が記述されているものもあれば、震源地からやや離れた東京周辺の人々の落ち着いた行動が記述されているものもある。記者が被災地の人々を直に見た様子の描写にはたとえば以下のようなものがある。

In Iwate prefecture, one of the three most affected, supplies are short in many places and refugees are battling intense cold. But complaints have been few. . . The bereaved suffer their grief quietly (*Financial Times*, Mar. 19, 2011).

（震災の影響を最も受けた三つの県のうち岩手県では、多くの場所で配給は不足して、避難者たちは厳しい寒さと戦っている。しかし、不平を言う者はほとんどいない。（中略）身内を失った者は、静かに悲しみに耐えている。）

Millions in Japan have been left without water, electricity, fuel or enough food and hundreds of thousands more are homeless, stoically coping with snow and freezing rain in the northeast (*The Cairns*

Post, Mar. 17, 2011).

(何百万もの人々が水も電気も燃料も十分な食料もなく、何十万という人々が家を失い、東北の雪と冷たい雨にストイックに耐えている。)

What is most impressive about these people who have lost absolutely everything except the clothes they were wearing when the tsunami struck is the calm with which they are accepting their dire predicament. They might weep quietly, wring their hands to release some pent-up feelings, but there are no furious demands for action from the authorities. They sit and they wait (*Daily Mail*, Mar. 17, 2011).

(津波に襲われ、着ている服以外のまったく全てのものを失ったこれらの人々についてもっとも感動することは、恐ろしい苦境を受け入れる彼らの冷静さである。人々は静かに泣いたり、鬱積した感情を解き放つため手を固く握りしめたりすることもあるが、当局の活動に対する激しい要求はしない。人々は座って、待っている。)

It is striking that there are no children crying and how orderly everything appears to be. Overall, there is an air of subdued calm and of people grimly adjusting to the new reality that their peaceful fishing town will never be the same again (*Evening Standard*, Mar. 14, 2011).

(際立っている事は、泣いている子供もなく、すべてのものが秩序的だということだ。全体にあるのは、抑制された冷静さと、彼らの平和な漁業の街は決してもう戻ってこないという新しい現実に厳然と適応しようとしている人々の様子だ。)

一方、東京やその周辺地域での人々の様子は、たとえば次のように報道されている。以下は、東京で働く英国人のブログが新聞に引用されたものである。

The Japanese are a stoical people and there was no real panic, just a lot of “Wow, that was really big.” (*Evening Standard*, Mar. 15, 2011)

(日本人は冷静で、本当の意味でのパニックはなかった。ただあったのは、「ああ、とても大きい地震だね」という多くの声だけだった。)

また、以下は英国出身で埼玉県在住の英語教師に、記者が震災時の様子を聞き取ったものである。

Mrs. Tamura Spragg, who lives in Kumagaya, Saitama, and has been in Japan for 10 years, continued: “People here are very calm – very Japanese, so to speak.” (*Western Mail*, Mar. 12, 2011)

(日本に10年滞在していて、現在は埼玉県熊谷市に在住している Tamura Spragg さんはこう続けた。「この人々はとても冷静だったわ。いわば、とても日本的でした。」)

日本在住の外国人だけではなく、以下のような日本人自身が語る日本人の冷静さについてのコメントも報道されている。このコメントにおいては、次節で扱う礼儀正しさについても同時に触れられている。

First Lieutenant Hideo Amagai, of the Self-Defence Forces, said his unit arrived on Sunday night and rescued 200 people. "They have been extremely calm and polite. There is no sense of panic. People don't shout 'Help!', they ask, 'Please assist me.'" (*The Guardian*, Mar. 16, 2011)

(自衛隊のアマガイヒデオ中尉によると、彼の部隊は日曜夜に到着し、200人を救助した。「被災者はとても冷静で礼儀正しかった。パニックは全くなかった。人々は「助けて」と叫ぶのではなく、「手を貸してください」と頼むのです。)

上記のエピソードは、欧米の記者たちの共感と呼んだのか、他の記者にも引用されていた。その記者はこのエピソードを引用しつつ、かつてはストイックさが英国人の気質とされていたことに触れ、次のようなコメントをしている。

The one certainty is that British stoicism, supposing it still exists, looks a pale cousin compared to the Japanese brand (*The Guardian*, Mar. 19, 2011).

(確実に言えることは、英国人のストイックさは、—そんなものがまだあるとしてだが—、日本のブランドに比べたら、影の薄いものでしかない。)

同じような形で、欧米のテレビ局や新聞の報道で伝えられたエピソードが、時には国を渡って他紙に引用されるケースもあった。たとえば以下はマレーシアの英字新聞の報道であるが、書き手は他紙の報道を引用して次のようなエピソードを記述している。

Food and water were running out fast but the long queues at the supermarkets were quiet, calm and Zen-like. No one screamed or shouted to show their frustrations. While the rationing was 10 items for each family, there were some who nonchalantly reduced theirs so that bigger families could accept more (*New Straits Times*, Mar. 18, 2011).

(食べ物も水もすぐに不足するが、スーパーマーケットの長い行列は静かで、冷静で、禪のようである。誰も欲求不満でわめいたり叫んだりしない。割当は各家族10品目であるが、大人数の家族にもっと割り当ててあげるために、屈託なく自分の割当分を減らしてあげている者がいた。)

このように、英語メディアの普及力は、国境を簡単に超えるため、一度根付いたステレオタイプは、とどまるところを知らずに世界に広がり続けるということを認識しておいた方が良いだ

ろう。

日本人の冷静さについては、以下の例のように、他の国との比較の形でも記述されていた。以下は震災時に偶然東京にいた英国人 Simon Somerville さんの証言として記述されているものである。

The mood among the locals is much less hysterical than it is overseas. I was amazed, when the earthquake hit, at the calmness. People weren't running around the streets shouting "the end is nigh", which would tend to be a Western reaction. . . There is no wailing (*The Daily Telegraph*, Mar. 19, 2011).

(東京の人々のムードは、海外に比べたらヒステリックではない。地震が起きたときの冷静さに私は驚いた。人々は「終わりが近い」と叫びながら道路を走り回るようなことはなかった。それは、西洋人のリアクションにはありそうだけど。(中略) 泣き叫んでいる人はいなかった。)

一方、こちらは各紙報道における日本人の様子を追っていたカナダ人雑誌記者の記述である。以下の記述には、ストイックさだけでなく、次節以降で扱う秩序正しさや犯罪のなさなども同時に触れられている。

I've been watching how stoic, law-abiding and dignified the Japanese have been under stress. There's been no looting, rioting or complaining, as they calmly line up for hours to get emergency food and water, in more orderly queues than Sunday at my Metro store. Compare this with the panic attack Americans and Ontarians had over a few snowstorms this winter – which they treated like Snowmageddon. I wonder how we North Americans would react if we confronted a crisis like Japan's. Would we turn stoic like the Japanese in the face of real problems? (*The Gazette*, Mar. 19, 2011)

(私は、日本人がストレス下でいかにストイックで、法を守り、高貴かということを見てきた。略奪も暴動も不平不満の声もなく、緊急時の食物や水を得るために何時間も静かに並んでいる。私の行く Metro store (スーパーマーケット) の日曜日の行列よりも秩序正しい。この日本人たちの様子と、この冬に来た何回かの吹雪に対してアメリカ人や(カナダの)オンタリオの人々が示したパニックとを比べてみるといい。彼らは Snowmageddon (雪による世界の終末の決戦) が来たかのようにふるまった。北アメリカの人々は、日本のような危機に直面したらどのように対応するのかと思う。私たちは、本当の問題が起こったときに、日本人のようにストイックでいられるだろうか。)

以上のように、日本人の冷静さやストイックさという言説は、過去からのステレオタイプの言説に、新しいエピソードが付け加えられながら、再生産されていく。しかしながら、実際には、日本人はおそらくただ冷静であったわけではないだろう。泣き叫んでいる人もいれば、怒

りを露わにする人、パニックになった人も当然いただろう。近年、中高年男性の駅員に対する暴力行為が増加しているとの報道もあるなど（2012年8月24日付日本経済新聞夕刊）、人々がキレやすくなったと言われる日本で、ストレス下で人々がそこまで完璧に冷静で礼儀正しかったという報道を全て信じることは難しい。

実は、数はとても少ないが、そのようなステレオタイプに反する日本人の様子を記述している記事もある。以下は、ある避難所を訪れた英国紙記者たちによる描写である。

In shelters across the region, residents wrapped in blankets clutched each other and wept openly (*The People*, Mar. 13, 2011).

(災害地域の避難所では、毛布に身を包んだ避難民たちが抱きしめ合っあからさまに泣いていた。)

Earlier a retired policeman told how many panicked when the quake struck, even though Japan is one of the most well-prepared countries in the world (*The People*, Mar. 13, 2011).

(先ほど、退職した警官が、地震が起こったとき多くの人がパニックになったと言っていた。日本は世界でも最も地震に備えのある国の一つであるはずだが。)

Amid the ruins the pitiful cry “please help us” has been heard repeatedly from a people previously associated with stoic inscrutability (*The Independent*, Mar. 18, 2011).

(がれきの間からは、かつて不可解なストイックさで知られた人々からの、「助けてください」という痛ましい叫び声が繰り返し聞こえてきた。)

これとは別に、東京周辺では、パニックによる買いだめがあったことも報道された。以下は、東京の調布市に在住するアメリカ人英語教師 Jeremy Jackson さんへのインタビューの記事である。

Jackson said the city is back to normal, but the people seem to be quite scared. Their frightfulness is evident when walking into stores, which are mostly out of bread, toilet paper and bottled water. . . It was people’s actions in Chofu that most startled Jackson, who said people frantically went out to stock up on goods (*Savannah Morning News*, Mar. 20, 2011).

(Jackson さんは、街は普段通りに戻ったが、人々はかなり恐れているように見えると言った。彼らの恐怖は、店に入ると、パンやトイレットペーパーや水がほとんど売り切れていることで明らかである。調布の人々の行動は、Jackson さんをびっくりさせた。Jackson さんによると、人々は大急ぎで買いだめに走っている。)

あからさまに泣き、パニックになり、助けを求めて叫び、買いだめに走るという上記のような日本人の記述には、ある意味、不幸に直面したときの人間としての普遍的にありそうな反応が書いてあり、聖人君子のような理想的な日本人の姿ばかりの報道の中、ある意味、少々の安心感さえ覚えるほどである。

3.2. 日本人の礼儀正しさを称賛する言説

日本人の礼儀正しさについての記述も冷静さの記述と同じように、“Their culture emphasizes civility and courtesy, which means you get the constant bowing and thank yous and sorrys.”（日本文化は礼儀正しさと丁寧さを重んじる。つまり、あなたはおじぎとありがとうの言葉とすみませんの言葉を何度も受け取るということだ。）（*The Straits Times*, Mar. 20, 2011）というように一般論的に述べられているものもあれば、以下の例のように記者が被災者を直接観察して記述しているものもある。

The gratitude and politeness of the refugees is striking, though for the moment it may reflect relief about surviving the disaster as much as the fabled Japanese spirit of forbearance (*The Guardian*, Mar. 16, 2011).

（被災者の感謝の気持ちと礼儀正しさは、際立っている。とはいえ、今はそれは、日本人の名高い辛抱強さと同じくらいに、災害で生き残った安堵感を反映しているのかもしれないが。）

また、別の記者は、「日本人の確固たる礼儀正しさと、一致団結好き」の証しとして次のようなエピソードを記述している。

Twitter users told stories about the stranded and the homeless sharing rice balls. Travelers heading north reported 10-hour car rides – with no honking. At a convenience store in one battered coastal prefecture, a store manager used a private electric generator. When it stopped working and the cash register no longer opened, customers waiting in line returned their items to the shelves (*Charleston Daily Mail*, Mar. 15, 2011).

（ツイッターのユーザーが、立ち往生している人々とホームレスがおにぎりを分け合った話を教えてくれた。北に向かった旅行者が言うには、10時間車に乗ったそうだが、その間一度もクラクションの音を聞かなかったそうだ。ある破壊された海沿いの県のコンビニでは、店のオーナーが自家発電機を使っていたそうだ。それが動かなくなって、レジがもう開かなくなったとき、列に並んでいた客たちは、商品を棚に戻しに行ったそうだ。）

一方、以下は、英国出身で、東京で子供の英語教師をする男性に、記者が震災時の様子を聞き取ったときの記述である。ここでは、小さな子供までが、震災時に礼儀正しく振る舞っている

る様子がコメントされている。

“The children were very well behaved when the quake was at its peak and I was quite scared. I looked under the desk and there was a three-year-old boy playing with a toy banana as if everything was normal – I don’t know why, but it really calmed me down.” (*Western Mail*, Mar. 12, 2011)

(「地震のピークの時、私はかなり怖かったが、子供たちはとても行儀良くふるまっていた。机の下を見たら、三歳の男の子が何もなかったようにバナナのおもちゃで遊んでいて、よく分からないがそれを見て私は本当に落ち着けた。)」

以下は、被災地で足をひどくけがをした女性の救助者に対する礼儀正しく丁寧な反応についての記事である。この記事では、日本人の不屈の精神についても同時にコメントされている。この記事は、前節でも引用したマレーシアの英字新聞の報道であるが、この記事の記者は、被災地で取材したのではなく、震災についての他の記事を引用しながら、日本人についてコメントしている。

What about that poor Japanese woman who was badly injured, her leg shattered? As medical personnel approached her, she made the gigantic effort to stand and bow to her rescuers, apologized for inconveniencing them and asked if there were people in a worse situation than her that needed attention. And she wasn’t the only one with that fortitude (*New Straits Times*, Mar. 18, 2011).

(足が粉々になるひどいけがをしたあのかわいそうな日本人女性はどうか。医療者が近づくと、彼女は多大な努力をして立ち、救助者におじぎをし、不都合をかけたことをわび、助けを必要としているもっと悪い状況の人たちがいるかどうか尋ねた。そして、不屈の精神を示したのは彼女だけではなかった。)

このように、ある記者が報じる日本人のステレオタイプの言説に沿った感動的なエピソードを他紙の記者が引用することにより、日本人のステレオタイプが再生産され、強化されていくというケースもある。人間の自然な姿として、このような危機のときにもたとえば横柄な人や自分本位の人が全くいなかったとは考えにくい、「日本人は礼儀正しい」という先入観を持って日本人を眺めるときにはおそらく礼儀正しさを表象する事柄しか目に入らないということなのではないかと推測される。結果、礼儀正しい日本人のエピソードばかりが報道されることになり、「礼儀正しい日本人」の神話はさらに強固になっていく。

3.3. 日本人の立ち直りの早さや強さを称賛する言説

英国のキャメロン首相は、東日本大震災を受けての国会での声明で、“Japan and the Japanese people are a resilient and resourceful nation.” (日本と日本人は、回復力が早く、問題解決能力が

ある。) (*Evening Times*, Mar. 15, 2011) とコメントしたが、日本人の立ち直りの早さというステレオタイプは、日本が第二次世界大戦敗戦後の数十年で経済大国に成長したことなどから、世界に広く知れ渡っている。それはたとえば以下のように一般論として語られる。

In the past the Japanese have showed remarkable resilience in the face of tragedy and swung into action to rebuild a shattered nation (*Waikato Times*, Mar. 19, 2011).

(過去に、日本人は、悲劇に立ち向かい、破壊された国を建て直す行為において、目ざましい回復力を示してきた。)

一方、被災地のエピソードとしては、以下のように、被災してすぐに片づけをはじめめる人々の様子が描写されている。記者は、震災後たった四日しか経っていないのに、死体などの悲劇の痕跡がかなり片付いていることに驚く。

Grateful as they are for outside help, it became clear that the Japanese don't really need – for these stoical, selfdisciplined, highly organized and resourceful people are accustomed managing their own. In every side-street, I found groups people toiling, almost like workerants, despite the seemingly overwhelming tragedy they have faced. They swept, scoured, sifted, wheeled barrows, made neat piles – even smiling resignedly as they went about their tasks (*Daily Mail*, Mar. 16, 2011).

(海外からの援助に感謝しながらも、日本人は本当にはそれを必要としていないことが明らかだ。このストイックで、自己訓練され、高度に組織立って、問題解決能力のある人々は、自分のことは自分でする習慣がついている。圧倒的な悲劇に直面しているにもかかわらず、全ての横丁で、人々のグループが、働きアリのように、働いているのが見られた。人々は、掃き、こすり取り、より分け、手押し車で運び、がれきをきれいに積み上げていた。仕事をしながら、あきらめたようなほほえみさえ浮かべていた。)

上記の記事では、先に扱った日本人のストイックさにも同様に触れられているし、また、次節で扱う集団での一体感や団結力も同時に描写されている。次の記事では、宮城県気仙沼市で被災した男性の様子が記述されている。

[I]n the devastated town of Kesenuma, Hideo Chiba was working his way through rubble of his home as snow blanketed the wreckage. “I thank God for saving my life,” Chiba said. “My family is all right, too. I’m even appreciative of the fact that I have work to do.” (*The Cairns Post*, Mar. 17, 2011)

(荒廃した気仙沼市では、チバビデオさんが、雪が残骸の上に積もる中、家のがれきを片付けていた。「命を救ってくれたことを神に感謝しているよ」とチバさんは言った。「家族も無事だった。やる仕事があるということにむしろ感謝さえしたいよ。」)

上記の記事では、被災したにもかかわらず、家族も自分も無事だったことに感謝さえし、早々に立ち上がろうとする強い日本人のステレオタイプが描かれている。次の記事も、地震や津波は強い日本人にとってはそれほど的大事でないかのような記述である。

The Japanese have experienced perdition on earth and stoutly persevered. No doubt that the Zen spirit has helped them through their living hell. If they could survive the atomic attacks and prosper, then the tsunami and quake calamities are simply an inconvenience (*New Straits Times*, Mar. 18, 2011).

(日本人は、これまで大地の破壊を経験し、頑強に耐えてきた。禅の精神が、生き地獄から立ち直るのに一役買ったことは疑いない。彼らは原子爆弾を生き延びて繁栄できたのだから、津波や地震の苦難くらいははただの不便でしかない。)

上の記事では、日本人の立ち直りの早さは、禅の精神のためという分析がなされている。現在の日本では特定の宗教を信仰している人は大変少なく、禅の精神が現在の日本人にどれだけの影響を与えているのか正直のところ不明であるが、日本人を禅と結びつけるステレオタイプの思考が海外には存在するということが分かるだろう。

次の記事では、災害後の状態を元の生活に戻そうとする立ち直りのスピードは、アメリカでは日本よりゆっくりだろうとコメントされている。

If an earthquake like the one in Japan struck in a similarly populated area in America, it would be an utter calamity. Not only would the devastation be vastly greater, but the pace of getting life back to normal would be slower (*USA today*, Mar. 14, 2011).

(もしアメリカの同じような人口の地域を日本のような地震が襲ったら、まったくの大災害になるだろう。破壊がより大きいだけでなく、生活が普通に返るペースもより遅いだろう。)

先述したように、ベネディクトも「日本人はいつまでも無気力を楽しまず、立ち直ろうとする」と記述しているが、震災時などに上記のような記事が流布されることで、日本人は立ち直りが早いとのステレオタイプが根付いていくのである。

3.4. 日本人の集団としての一体感や連帯、助け合いの態度を称賛する言説

この言説も、今回の震災報道ではかなり多く流布された。一般論的なものもあれば、日本人自身が語ったこととして報道されているものもある。一般論的なものとしては、たとえば次のような記述が挙げられる。

Having lived for centuries in such close proximity to one another and facing a common threat, the Japanese have evolved into a much more communitarian and ordered society than ours (*USA today*,

Mar. 14, 2011).

(何世紀もの間、お互いに近接して暮らし、共通の脅威に直面することで、日本人は、私たちの社会よりも、はるかに共同体的で秩序正しい社会に発展してきた。)

日本人自身がこの言説を語っているエピソードも多く報道された。たとえば、菅直人首相(当時)は、震災二日後に、国民に向けて次のようなメッセージを伝えた。

Mr. Kan said: "It is the biggest crisis Japan has encountered in the 65 years since the end of World War II ." Appealing for calm, he added: "I strongly believe that we can get over this great earthquake and tsunami by joining together." (*The Daily Mirror*, Mar. 14, 2011)

(菅首相は言った。「これは第二次世界大戦終了以来 65 年ぶりに日本が経験する最も大きな危機です。」冷静になるよう求めながら、彼は付け加えた。「私は、みんなが一体となることでこの大地震と津波を乗り越えることができると信じます。」)

また、経済財政政策担当大臣(当時)の与謝野馨氏の次のようなコメントも報道されている。

"Japanese people had this feeling of unity. They felt that everyone had to cope with this very difficult situation together." (*Financial Times*, Mar. 19, 2011)

(「日本人は、連帯感を持っている。彼らは、全ての人がこの困難な状況と一緒に乗り越らなければならないと感じている。」)

菅首相(当時)や与謝野氏のコメントは、被災者の様子を描写しているものではなく、「日本人はみんなで連帯して乗り越るべきである」というあるべき規範を述べているものであると言えよう。

一方、避難所にいた日本人男性で、学校長をしている Mitsuhiko Shobuke さんに、記者が、人々がどのように困難に対処しているのかを尋ねると、男性は次のように答えたと報道されている。このコメントでは、連帯だけでなく、次節で扱う犯罪のなさや秩序正しさにも同時に言及されている。

"Japanese people are enduring. It's not in our culture to express our sorrow or anger. We grin and bear it. There has been no looting and no riots here because in our culture we value order and dignity and we help each other. I am proud of how people have behaved." (*Evening Standard*, Mar. 14, 2011)

(「日本人は耐えている。悲しみや怒りを表すのは、私たちの文化にはない。にこりと笑って、耐えるのです。ここでは、略奪や暴動はない。なぜなら、私たちは、秩序や威厳を重んじ、お互いを助け合うのです。私は、人々の振る舞いに誇りを持っています。」)

また以下は、東北に親族や友人が暮らす、カナダ在住の日本人 Akiko Sugawara さんが、カナダで記者の取材に答えたものである。ここでは、日本人同士の助け合いとともに、日本人の忍耐強さや強靭さにも触れられている。

“I heard people are helping each other even though someone’s not organizing the situation. People are just patiently waiting for help and if somebody has extra stuff, people are just sharing. I think Japanese people are very strong and really proud.” (*The Leader*, Mar. 15, 2011)

(「誰かが仕切っているというわけではないけど、人々はお互いに助け合っているとのこと。人々は、忍耐強く助けを待っていて、誰かが余分に持っていたら、分け合っているのです。私は、日本人はとても強く、誇り高いと思います。)」

欧米人によるコメントでは、被災地の岩手県大船渡市で英語教師をしている英国人 Robert Bailey さんが、記者の取材に対し、日本人の気質を次のように説明している。

“One thing that’s etched into the Japanese personality is that they must be clean and tidy and that each person is responsible for maintaining their own area,” he said (*Daily Mail*, Mar. 16, 2011).

(「日本人の人格に刻み込まれていることの一つとして、彼らは清潔で整然としていなければならないし、各自が自分の場所をきちんと維持することに責任を持つというのがあります。」と彼は言った。)

次は、福島県郡山市で英語教室を運営する英国人 Roy Cameron さんが、震災後の日本人の様子などを詳細に記した日記を記者に公開したものである。以下は、遠くに避難するためにガソリンを求める人々の列についての、震災後四日目の記述である。

A friend at a petrol station saved ten litres for us. When the petrol runs out, no one in the queue complains. They’ve been there for hours but they just drive away in silence. That would never happen in the U.K. (*Mail on Sunday*, Mar. 20, 2011).

(友人が、私たちのためにガソリンを 10 リットル分けてくれた。ガソリンが売り切れたとき、並んでいた人は誰も文句を言わなかった。彼らは何時間もそこに並んでいたのに、静かに車で帰っていった。こんなことは絶対に英国ではありえない。)

また、別の新聞においては、東京に住むアメリカ人留学生 Erik. K. Jacobs さんにとって、震災は忘れられない体験になったと報じられている。彼は、日本人の連帯感について次のように記者にコメントしている。

Jacobs said it was something to see all the people of Tokyo work together to make sure everyone got home safely. People were friendly with directions, and one shop was even handing out free rice treats on the way home so that people would have food, he said (*Public Opinion*, Mar. 13, 2011).

(Jacobsさんは、全ての人が安全に家に帰り着けるようにと、東京の人々全員が一体となって動いたことは一見に値したと言った。人々は、道を教え合い、ある店は人々が食べ物を食べられるようにと、家への帰り道で無料でおにぎりを配ってさえた。)

このように、震災の悲劇の中、日本人が集団で一体になって協力し、美しく助け合っている様子が多くの記事で描写されている。しかしながら、このような連帯は、近年、孤独死や無縁社会が社会問題にすらなっている現在の日本人に本当に特有のものなのだろうか。ソルニット(2010)は、1906年のサンフランシスコ地震、2001年のアメリカ同時多発テロ、2005年のニューオーリンズを襲ったハリケーンと大洪水など五件の大災害の様子を、被災者や救助者などの語りを通して検証した結果、「地震、爆撃、大嵐などの直後には緊迫した状況の中で誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す。大惨事に直面すると、人間は利己的になり、パニックに陥り、退行現象が起きて野蛮になるという一般的なイメージがあるが、それは真実とは程遠い(11)」と主張し、実際は災害時には人々が連帯して助け合い協力する即席の地域社会が出現すると論じている。そうであるならば、集団の一体感や連帯した助け合いは、今回の震災報道が示唆するような日本特有のものではなく、人間に普遍的なものだということだ。つまり、どの国の人でも、時と場合に応じて個人主義にもなり、集団主義にもなるということである。どこでも起こりうる普遍的なことを、欧米人も日本人自身も日本特有なものとして語る限り、われわれは日本人論のステレオタイプの言説から自由になることができない。

3.5. 震災に乗じた犯罪のなさや秩序正しさを称賛する言説

犯罪の少なさや秩序を保っている様子を描写した記事も多数見られた。犯罪の少なさを述べる言説は、一般論的なものはほとんどなく、次のように、被災地の様子を見聞しての描写が中心である。

In spite of hardship, there has been no incidents of looting or disorder (*Financial Times*, Mar. 19, 2011).
(苦難にもかかわらず、略奪や暴動の事件はない。)

Despite the devastation, they remained calm and there were no reports of lawlessness or looting (*Sunday Mail*, Mar. 13, 2011).

(打ちひしがれているにもかかわらず、彼らは冷静で、不法行為や略奪の報告はない。)

上記のように、被災地で取材をする記者が、犯罪がないと報道すると、それが以下のように他紙にも引用されていくケースが多い。

There was no looting, no marauding, no lawbreaking, according to what CNN reported, unlike that witnessed after disasters like Hurricane Katrina, where thuggery and anarchy were natural side effects (*New Straits Times*, Mar. 18, 2011).

(CNN のレポートによると、ハリケーンカトリーナのような災害の後などには暴行や無秩序は当然の結果として見られたが、それとは違い、略奪、襲撃、不法行為はない。)

[L]ooting is something no self-respecting Japanese citizen would dream of. We Americans could take a lesson from them (*Tribune-Review*, Mar. 18, 2011).

(自尊心のある日本人は略奪しようなどと夢にも思わない。われわれアメリカ人も彼らに習うことができよう。)

このようにして、結果的に、「ほとんど全ての記者が秩序正しさと冷静さについてコメントする (“Nearly every reporter has commented on the orderliness and apparent calm”, *The Independent*, Mar. 14, 2011)」こととなったようである。次の記事は、略奪が少数あったことに触れている。しかし、警察などの公式発表としてではなく、真偽が定かではない被災者の言葉として触られている。

Social stability is another concern. In the disaster zone, there have been few reports so far of crime or violence, though several refugees said a small number of looters had been entering deserted homes to steal valuables (*The Guardian*, Mar. 16, 2011).

(社会の安定は心配事だ。災害現場では、これまで犯罪や暴力の報告はほとんどない。もっとも、数名の被災者が言うには、少数の略奪者が貴重品を盗むために空き家に入ったということだが。)

上記の記事はこのあと続けて、「95%の避難者は、ルールとエチケットを守っている。 (“95% of the refugees have followed rules and etiquette”, *The Guardian*, Mar. 16, 2011)」と述べ、あくまで日本人は秩序正しいと印象づけるような記述をしている。

また、先述した福島県郡山市で英語教室を運営する英国人 Roy Cameron さんは、震災後二日目の日記にこう記している。

People queued for water in the park today. Shop windows are smashed but televisions and computers are inside – no looting. The supermarket had stalls for food in the car park. Staff said not to be selfish,

just take one of everything. We queue for an hour and everyone's so quiet (*Mail on Sunday*, Mar. 20, 2011).

(今日、人々は公園で水をもらうために並んだ。店の窓が壊れていて、テレビとコンピューターが中に入った。でも略奪する人はいない。スーパーは、駐車場に食べ物の陳列台を出した。スタッフが、利己的にならずに、全てのものを一つずつ取るように言った。私たちは一時間も並んだが、みんなとても静かだった。)

また、次の描写は、犯罪とは別の視点から、避難所がきちんと整頓され、秩序が保たれている様子が記述されている。

A ferry boat is sitting atop a house in the tsunami-ravaged town of Otsuchi, but at shelters nationwide shoes are neatly removed at the entrance and the trash is sorted by recycling type (*Charleston Daily Mail*, Mar. 15, 2011).

(津波で破壊された大槌町では、フェリーが家の屋根に乗っかっている。しかし、全国の避難所では、靴が入り口で脱ぎそろえられ、ごみはリサイクルのために種類ごとに分別されている。)

このような日本人の様子の記事を受けて、California State University, Northridge の教授は次のように発言したと報じられている。

The CSUN professor said he was impressed by reports of Tokyo residents' orderly reaction to the quake. "I think we (in Los Angeles) would have people panic a little more. We might see people use it as an excuse for civil unrest," Ballard said. "We'd probably need more of a law-enforcement response than they do in Japan." (*Daily News*, Mar. 12, 2012)

(CSUN の教授は、東京の人々の秩序ある反応の記事に感心したと言った。「ロサンゼルスでは、われわれはもっとパニックになるだろう。暴動をする言い訳にする人もいるかもしれない。」教授は言った。「おそらくわれわれは日本よりも法執行が必要となるだろう。」)

以上のような報道ばかりにさらされた読者は、日本人は自律的で、秩序を重んじ、災害に乗じた犯罪などを犯さないとのイメージを持つであろう。しかし、冒頭でも少し触れたように、実際には震災に乗じた犯罪は多数あった。たとえば、福島県では、2011年3月から2012年2月の間に、1193件の空き巣被害があり、これは前年よりも七割も増えている(2012年3月17日付朝日新聞夕刊)。その他、店舗荒らしや義援金を語った詐欺なども報告されており、不名誉な事ではあるが、日本人の実態はステレオタイプに合致したものでは全くない。欧米人記者が自らのステレオタイプに合った事象のみを無理に見つけて報道しようとする、このような正確ではない報道が世界を駆けめぐることになる。

3.6. まとめ

以上、今回の震災報道に見られた日本人のステレオタイプを称賛する五つの言説、1、日本人の冷静さやストイックさを称賛する言説、2、日本人の礼儀正しさを称賛する言説、3、日本人の立ち直りの早さや強さを称賛する言説、4、日本人の集団としての一体感や連帯、助け合いの態度を称賛する言説、5、震災に乗じた犯罪のなさや秩序正しさを称賛する言説を例示してきた。この五つの言説は、先述したように、これまでの歴史の中で欧米人の中に根付いている日本人のステレオタイプをほぼ踏襲している。そして、これらの言説は必ずしも日本人の実態を正確に反映していない。このように考えると、被災地の日本を訪れた欧米の記者たちは、色のついていない眼鏡で被災者たちを観察した上で日本人の様子について報道したというよりは、あらかじめ自らの中に形成されていた日本人のステレオタイプに合致する事象を探して報道したという傾向の方がより強いのではないかと思われるのである。

震災報道に携わった記者たちの中には、日本の支局にもともと駐在していた知日派の記者もいただろうが、震災報道のために間に合わせて日本入りした記者もたくさんいただろうと思われる。彼らは「日本通」でなかったゆえに誤解や混乱もあったかもしれない。現に、本論では触れなかったが、明らかな誤報がいくつか見られたことは事実である²。しかし、それでも今回の震災報道における日本人の表象の問題は、そこにあるのではなく、多くの欧米の記者たちが、自分たちが見たい日本人の姿しか見ずにステレオタイプ的な日本人の表象を報道したこと、そしてそれを当の日本人の多くが純粋な称賛と受け止めて喜んだというところにあるのだろうと思われる。たとえ肯定的なステレオタイプであるとしても、ステレオタイプが維持され続けている限り、東洋人を差別するオリエンタリズムは続いていく、筆者はそこを危惧しているのである。

4. おわりに

本論では、幕末・明治期から現在に至るまでのいくつかの欧米人による日本人をめぐる言説を簡潔に概観し、その中で連綿と規定されてきたステレオタイプな日本人像が、東日本大震災直後に発表されたクリストフ氏のコラムとその後の英語メディアによる一連の日本称賛報道の中に色濃く反映されてきていることを検証してきた。幕末・明治期に、西洋を優位におき、東洋を未開で野蛮とみなすオリエンタリズム的で *patronizing* な視点から形成された日本人のステレオタイプは、日本が後進国であった時代を経て、高度に発展した現在にいたってもなお、再生産し続けられているということを示すことができたと思う。もちろんステレオタイプには、否定的なものだけではなく肯定的なものもあるが、相手を一枚岩と捉え、偏見と先入観に基づいて分類化する行為は、本質的に差別的であると筆者は認識する。また、今回の震災報道の舞台が、東洋の日本の中でも特に「奥まった、へんぴな、洗練されていない (“*obscure, remote and unsophisticated*”, *The Times*, Mar. 12, 2012)」と西洋人にも日本人自身にも認識されがちな東北、つまり、日本の中でもさらに抑圧された位置にある場所、であったことの意味も、

あるいは深く考える必要があるかもしれない。

一方で、西洋や欧米を一枚岩と考え、西洋人がみな同じように日本人を差別していると捉えることは、また別の極論にすぎないという矛盾は筆者も意識しているつもりである。だが、ある人が発言することや記述することは、おそらくその人一個人の純粋にオリジナルな考えではなく、連綿とその民族に受け継がれてきた偏見や先入観や歴史のようなものを背負っているはずと考え、今回はあえて英語メディアを通して、東洋（日本）にオリエンタリズム的な視線を投げかけるものとして西洋（人）や欧米（人）を一つの実体として扱った。

英語メディアが西洋中心の視点から、西洋はこうで、日本（東洋）はこうである、と差異を引き立たせる言説を流布することは、東洋を現在の位置にとどめ、西洋の優位性を維持することに寄与する。西洋と東洋は違うことを前提に物事を見つめると、どんな小さな違いにすらも注目し、強調してしまうことになる。そしてそれが結果的にさらなる西洋による東洋の差別と維持につながる。そのことを認識しつつ、われわれは固定化したステレオタイプに抵抗する有効な手段を講じていく必要があるだろう。

注

- 1 溝上由紀 (2011) 「アメリカ映画「ザ・コーヴ」をめぐる英語の言説の批判的分析—英字新聞・雑誌の論調にみられる「イルカ・イデオロギー」、すなわち「価値観」の植民地主義」『愛知江南短期大学紀要』第40号。
- 2 たとえば、福島第一原子力発電所事故の収束の作業を、実際には多数で交替でやっているにもかかわらず、特定の50人の作業員が命を犠牲にしてやっていると報じた誤報は多数見られたし、震災後の東京を人が誰もいない「ゴースタウン」であると表現した実態に合わない報道なども見られた。

引用記事一覧

東日本大震災関連報道

- 'People tried to run. They had no chance.', by Harrison, David, *The Sunday Telegraph*, London, U.K., Mar. 13, 2011.
- 'Just like Hiroshima: Apocalypse Japan: Killer Tide's aftermath team with population of 17,000 turned into a wasteland by tsunami [Edition 2]', by Wells, Tom, *The Sun*, London, U.K., Mar. 14, 2011.
- 'God can still be found in devastation [Eire Region]', by Dooley, Mark, *Daily Mail*, London, U.K., Mar. 16, 2011.
- 'Japanese expect death toll to rise', by Harlan, Chico, *Charleston Daily Mail*, Charleston, W.V., U.S., Mar. 15, 2011.
- 'For a Change, Proud to be Japanese', by Azuma Hiroki, *New York Times*, New York, N.Y., U.S., Mar. 17, 2011.
- 'Sympathy for Japan, and Admiration', by Kristof, Nicholas, D., *New York Times*, New York, N.Y., U.S., Mar. 11, 2011.
- 'Our View: Cataclysm; Japan's horror', anonymous, *Sunday Gazette-Mail*, Charleston, W.V., U.S., Mar. 13, 2011.
- 'A shaken nation,' by Dickie, Mure, et al., *Financial Times*, London, U.K., Mar. 19, 2011.
- 'Fear and panic grips nation; Evacuation at nuclear plant; Supermarkets stripped bare; Snowfalls add to woes', anonymous, *The Cairns Post*, Cairns, Australia, Mar. 17, 2011.

- 'Homeless, desperate families are left to forage for scraps in the snow: Japan: time to get out [Eire Region], by Snears, Richard, *Daily Mail*, London, U.K., Mar. 17, 2011.
- 'We are all terrified. There is no road map and we have no idea where we go from here', by Cohen, David, *Evening Standard*, London, U.K., Mar. 14, 2011.
- 'Can I outrun a radiation cloud? I just did Tokyo to Yokohama in 25 minutes on my motorbike: Londoner Michael Summons, a trader at an international bank in Tokyo, who has lived in Japan since 1987, survived the earthquake. But as the nuclear threat grows, he faces an agonizing choice,' by Summons, Michael, *Evening Standard*, London, U.K., Mar. 15, 2011.
- 'The force just continued to grow – it felt like the world was going to end': EXPAT WELSH TELL OF TERROR AS APOCALYPTIC QUAKE HIT', *Western Mail*, Cardiff, U.K., Mar. 12, 2011.
- 'Disaster in Japan: A shortage of petrol and food, and too many bodies to bury: An estimated 10,000 people have died in Ishinomaki. Jonathan Watts finds a desperate effort to feed the living as the bodies pile up,' by Watts, Jonathan, *The Guardian*, London, U.K., Mar. 16, 2011.
- 'Saturday: We all know the slogan Keep Calm and Carry On, but would we?,' by Jack, Ian, *The Guardian*, London, U.K., Mar. 19, 2011.
- 'Spirit of Zen shines through,' by Anshar, Azmi, *New Straits Times*, Malaysia, Mar. 18, 2011.
- 'The Japanese knew the big one was coming': Japan earthquake: Jupiter's Simon Somerville, safely back from Tokyo, tells Emma Wall why the Japanese economy should recover strongly from the disaster,' by Wall, Emma, *The Daily Telegraph*, London, U.K., Mar. 19, 2011.
- 'With all these world crises, it's hard to pick a top seven,' by Freed, Josh, *The Gazette*, Montreal, Que., Canada, Mar. 19, 2011.
- 'AFTER SHOCK: QUAKE TSUNAMI FIRES TENS OF THOUSANDS KILLED AND NUCLEAR REACTOR ON BRINK OF A MELTDOWN,' by Collins, David, *The People*, London, U.K., Mar. 13, 2011.
- 'Fukushima has revealed the dangers of the nuclear road', anonymous, *The Independent*, London, U.K., Mar. 18, 2011.
- 'JAPAN EARTHQUAKE RATTLES CLYO NATIVE,' by Goricki, Matthew, *Savannah Morning News*, Savannah, Ga., U.S., Mar. 20, 2011.
- 'A bitter winter wind: With hope, courage and determination, Japan will recover', by Tan, Sumiko, *The Straits Times*, Singapore, Mar. 20, 2011.
- 'Health fears over nuclear risk: [Third blast sparks panic as radiation leak spreads 1]', anonymous, *Evening Times*, Glasgow, U.K., Mar. 15, 2011.
- 'Japan's crisis may spark major revival', by Hall, Terry, *Waitako Times*, Hamilton, New Zealand, Mar. 19, 2011.
- 'A VERY SELFLESS BRITISH HERO: When the tsunami alarm sounded people desperately ran for the hills. But this young English teacher's only thought was how could he save his class of 42 terrified pupils [Edition 2]', by Jones, David, *Daily Mail*, London, U.K., Mar. 16, 2011.
- 'Japanese earthquake sends sobering message for USA', anonymous, *USA Today*, McLean, Va., U.S., Mar. 14, 2011.

- 'Is it a dream? I feel like I am in a movie: JAPAN'S NIGHTMARE THE DEVASTATION', by Fricker, Martin, *The Daily Mirror*, London, U.K., Mar. 14, 2011.
- 'Heartbroken watching her home country struggle with quake', by Su, Hannah, *The Leader*, Surrey, B.C., Canada, Mar. 15, 2011.
- 'The British Embassy says evacuate 80km from the reactor. We're 72.2km away and praying 7.8km doesn't make a difference: Terror, stoicism...and cheese and onion crisps. A Scots teacher's gripping diary of a week at the heart of the Japanese catastrophe [Scot Region]', by Cameron, Roy, *Mail on Sunday*, London, U.K., Mar. 20, 2011.
- 'Quake rattles Chambersburg man studying Japan', by Barnes, Roscoe, *Public Opinion*, Chambersburg, Pa. U.S, Mar. 13, 2011.
- 'THEY 'T DN DI A STAND CHANCE: World mourns disaster victims HORROR IN JAPAN 10,000 FEARED DEAD IN JUST ONE TOWN AS MASSIVE WALL OF WATER FLATTENS ALL IN ITS PATH', by Findlay, Russel, *Sunday Mail*, Glasgow, U.K., Mar. 13, 2011.
- 'Comedians wary of making light of tragedy in Japan', by Loeffler, William, *Tribune-Review*, Greensburg, Pa., U.S., Mar. 18, 2011.
- 'Where modernity co-exists with an age-old menace', by Hamilton, Adrian, *The Independent*, London, U.K., Mar. 14, 2011.
- 'Could it happen here? Not exactly', anonymous, *Daily News*, Los Angeles, Calif., U.S., Mar. 12, 2011.
- 'Remote area houses much vulnerable infrastructure', by Parry, Richard, Lloyd, *The Times*, London, U.K., Mar. 12, 2011.

その他

- 'Look Out for the Diaoyu Islands', by Nicholas D. Kristof, *New York Times*, "On the Ground", Sep. 10, 2010, <http://kristof.blogs.nytimes.com>.
- 'Mad in Japan', by Gill A. A., *The Sunday Times Magazine*, London, U.K., Sep. 9, 2001.

引用文献

- 石澤靖治 (2004) 「小泉は「沈みゆく船」の船長だ」—「日本叩き」から「日本無視」へ— 石澤靖治編 (2004) 『日本はどう報じられているか』 東京：新潮社。
- 小川さくえ (2007) 『オリエンタリズムとジェンダー—「蝶々夫人」の系譜』 東京：法政大学出版局。
- 近藤恭子編著 (2005) 『歪んだ鏡に写った日本—国・文化をめぐるイメージと対外文化政策—』 東京：GNAC フォーラム。
- サイド・エドワード・W (1993) 『オリエンタリズム 上』 板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、東京：平凡社。
- サイド・エドワード・W (1993) 『オリエンタリズム 下』 板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、東京：平凡社。
- 佐伯彰一&芳賀徹編 (1987) 『外国人による日本論の名著 ギンチャロフからパンゲまで』 東京：中央公論新社。

- 佐藤成文 (2011) 「東日本大震災をめぐる世界各地の報道・論評に見る日本観」『英語教育』2011年10月増刊号.
- ソルニット・レベッカ (2010) 「災害ユートピア—なぜその時特別な共同体が立ち上がるのか」、高月園子訳、東京：亜紀書房.
- 竹山道雄 (1984) 「外国人の日本文化批判—日本人は何故こうも誤解されるのか—」『主役としての近代』(1984) 東京：講談社.
- 土生修一 (2004) 「ハイテク・トイレに驚き、痴漢を笑う—日本の社会風俗に〔未来〕を見る—」石澤靖治編 (2004) 『日本はどう報じられているか』東京：新潮社.
- フロイス・ルイス (1991) 『ヨーロッパ文化と日本文化』岡田章雄訳注 東京：岩波書店.
- ベネディクト・ルース (2005) 『菊と刀—日本文化の型』長谷川松治訳 東京：講談社.
- 別府春海 (1982) 「日本人は集団主義的か」杉本良夫&ロス・マオア編著 (1982) 『日本人論に関する12章 通説に異議あり』東京：学陽書房.
- マオア・ロス&杉本良夫 (1982) 「これでいいのか日本人論」杉本良夫&ロス・マオア編著 (1982) 『日本人論に関する12章 通説に異議あり』東京：学陽書房.
- 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学 現代日本のアイデンティティの行方』名古屋：名古屋大学出版会.
- 渡辺京二 (2005) 『逝きし世の面影』東京：平凡社.
- Richardson, John, E. (2007) *Analysing Newspapers: An Approach from Critical Discourse Analysis*, New York: Palgrave Macmillan.
- Caldas-Coulthard, Carmen, Rosa (2007) 'Cross-Cultural Representation of 'Otherness' in Media Discourse', in Weiss Gilbert and Ruth Wodak (eds.) (2007), *Critical Discourse Analysis: Theory and Interdisciplinarity*, New York: Palgrave Macmillan.